

続・ 珈琲の思い出 33

鈴木 優子

と、その時、

「あれ？ママ帰ってきたの？パパ？ママ？そんなところで何してるの？」

長女の千春が目をごすりながら階下へやってきて、慌てて優子たちは身体を離れた。

「う、うん、ただいま、千春。ごめんね、起こしちゃって。すぐに行くわね。」

そう言うと、優子は娘の背中を軽くさすってやりながら、一緒に子供部屋へと向かった。

子供部屋の2段ベッドの上の段ではすでに次女の葵(あおい)がかわいらしい寝息を立てながら熟睡していた。

「よしよし、千春、ママがしばらくお背中トントンしてあげようか？」

「うん。ママ・・・今日のママ、とってもいいにおいだね・・・」

子供部屋の入り口に立って優子を物欲しそうにみている夫に向かって、

「義弘さん、ごめん。私、千春を寝かせてくるから、先に休んで」と制すると、夫を自室へと追いやった。

気を抜くと、すぐに和樹のことを思い出してしまうが、娘たちと一緒にいるときは、和樹のことを絶対に考えてはいけない、と自分に強く言い聞かせながら、千春がぐっすり寝入るのを辛抱強く待った。

自室をそつと窺うと、すでに義弘はイビキをかいて熟睡していたので、優子は急いで浴室に向かうと、もどかしい思いで服を脱いだ。

一人きりのバスルームですでに火照っている身体に熱いシャワーを浴びせていると、いやがおうにも和樹のことが頭に浮かんできた。あの、しつこく絡みついてくる指と、額への熱いキス・・・。

優子はいつしかシャワーを自分の一番感じている部分へと当てていった。

早く、はやく、和樹に会いたい・・・

今すぐに！（続く）